



TITLE:

# <學界展望>印度支那考古學 - 特にその寺院址調査

AUTHOR(S):

水野, 清一

---

CITATION:

水野, 清一. <學界展望>印度支那考古學 - 特にその寺院址調査. 東洋史研究 1936, 1(3): 278-282

ISSUE DATE:

1936-02-28

URL:

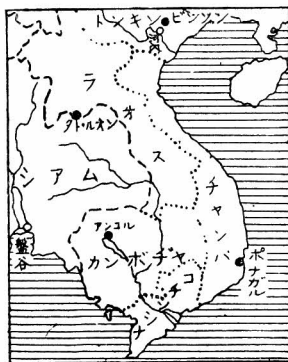
<https://doi.org/10.14989/142933>

RIGHT:

## 學界展望

### 印度支那考古學

——特にその寺院址調査——



河内にある佛蘭西極東學院は印度支那における歴史研究の中心機關である。考古學についても、もちろんさうである。この一國の佛蘭西人の業績を離れて、印度支那考古學を考へることは全然不可能である。この數年間ににおける極東學院の考古學的活動はおのづから二つの分野を有した。

ひとつは東京・安南地方における漢・六朝の支那墳墓であり、他はカンボヂヤのアンコール Angkor 都址の調査であつた。前者は漢代文化の播及を物語るものとして興味があり、*London Illustrated News* も新聞種にとりあげた。また歴史學研究、人類學雜誌も河内に遊んだ小林知生君の手記を登載した。私は後者を中心として印度支那における寺院址調査の一斑を紹介したいと思ふ。據るところは主として *Annual Bibliography of Indian Archaeology for*

*the year 1933, Revue des Arts Asiatiques IX, 1, Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême Orient XXXVII.* の記事である。

アンコールはクメール文化の中心地である。九世紀初頭に「瓜哇」(スマトラ、或は馬來半島)から來たジャヤヴァルマン二世 Jayavarman II が都城を建設してより、宏大な幾多の寺院——例へばアンコール・ヴァット、バイヨン等が建立され、その遺構は今日に現存する。そしてこの遺址の清掃・修理・復原の保存作業に並行して調査事業が行はれてゐるのである。この地方における考古學的成果はすべてこの勞苦と忍耐を要する作業の結果である

ことを銘記せねばならぬ。アンコール保存作業の主任マルシャル氏 H. Marchal は一九三三年十一月、バルマンティエ氏 H. Parmentier に代つて印度支那考古學調査部主任となり、したがつて當時カンボヂヤ記念物保存を擔當してゐたトゥルヴェ氏 G. Trouvé がアンコール保存の主任となつた。マルシャル氏には *Guide archéologique aux temples d'Angkor*, 1928 なる案内書があるが、その後におけるアンコール研究の目覺しい進展はこの一九二八年の書物すら正にアウト・オブ・デートの書たらしめやうとしてゐる。そのひとつはバイヨン寺院の年代觀である。バイヨン寺院はアンコール・トム Angkor Thom (トムの都邑) の方形都城の中心にある。したがつてジャヤヴァルマン二世の建設した最初の都邑アンコールの中央に建立した寺院に比定され、九世紀末とされてゐた。この年代觀はアイモニエ氏に基くのである (Aymonier; *Le Cambodge*, 3 vols, Paris 1900, 1901, 1904) が、パルマンティエ氏も襲ひ、またマルシャル氏もしたがひ、むしろクメル建築史の通説であつた。しかしその様式上からする疑問が、ミュゼ・ギメーのステルン氏 Ph. Stern をしてバイヨンとアンコール・トムの方域が決してスドック・カ

ク・トム Sdok Kok Thom の碑に云ふジャヤヴァルマン二世のアンコール、すなはちヤソダラブラ Yacodharapura にあらざることを證明せしめた。ついでゴルウベフ氏 H. Goloubew が別にヤソダラブラの位置を確定するとともに、セーデ氏 Coedès はバイヨン寺院が實は十二世紀末か、十三世紀初頭の建築にすぎぬことを證明した。かくてバイヨン寺院年代觀の下グマは完全に粉碎されたわけであるが、それではヤソダラブラの位置とその中央山頂に建立したといはれる寺院とはどこにあるのか。これに對して一九三一年、ゴルウベフ氏は誰も考へ及ばなかつた大膽なる一假説を提出した。それは歴代の都邑が必ずしもエキザクトに相かざるものでないといふことから出發して、アンコールの遺跡圖を案じ、プノム・バケン Phnom Baken すなはちアンコール・トムの少し南にあるシヴァ神の山頂寺院とこれを中心にして劃された方域——それは西・北・南の三邊は盛上つた土手により、東の一邊はシエム・レアプ河 Siem Reap によつて構成される——こそヤソダラブラとその中峯寺院にほかならぬと説明した。一九三一年十一月に行はれた踏査をはじめとして、三二年から三四年に亘る組織的發掘はあらゆる

點においてこの想定のためしかなることを證明した。まづ  
プノム・バケンを中心とする境域遺構及び道路その他の  
調査によつて、厳正にシムメトリカルな都邑の體制が明  
らかにされ、その他、鋪石、臺、階段、池、彫像、陶器  
の堆積等がプノム・バケンを中心とする古都の存在を確  
めた。そして一九三一年やうや

く發見され、セーデ氏 Coedès,

Inscriptions malaises de Cri-

viaya (BEFEO. XXX. pp. 28-

80) によつて釋されたひとつの

碑文はカムラテン・ヤガト・ヴ

ナム・カンタール、すなはちス

ドック・カク・トムの碑文にい

ふ中峯の神に當然奉獻さるべき

ものゝ表を含んでゐたのであ

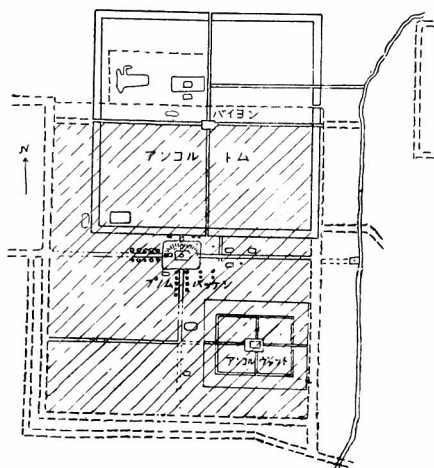
る。かくて多年の誤解と不確實

の後にやうやくヤソダラプラ、すなはち最初のアンコル

の位置が確定された。アンコル・ヴァットはこの都邑よ

り數世紀後にその東南部に建設され、また數世紀後にア

ンコル・トムはこの都邑の東北部を含んで建設されたの



である。

もうひとつの發見といふのはプノム・バケンの西方八  
軒にあるプラサト・アク・ヨム寺院 Prasat Ak Yom であ  
る一九三二年の暮、トルウヴェ氏によつて發見されたの  
であるが、それまでといふものは全く完全に土中に埋没  
してゐた。三層のピラミッドと三層

の磚築基壇と支へ壁によつて僅かに  
保たれた泥築基壇とが發掘された。

殊に中央聖室の下に深い堅穴があり

その底は部屋をなしてゐることが知

られた。その堅穴は既に盜掘の厄に

遭つてゐたが、疑ひもなく原初のも

のである。こゝに發見された一碑文

はガムビレスヴァラ Gambhira, Varā

即ち深井のシヴァ神に奉獻したもの

であつた。この發見は考古學者に多

大の指唆を與へた。といふのは寺院の中央に寶物を埋藏

することは必ずしもこの寺院に限られぬ筈だからであ

る。當のトルウヴェ氏はすぐこの方法を上述のバイヨン

寺院に應用して、或る程度の成功をおさめた。それは十

四米の深所で水層に遭遇し、以下の調査を断念しなければならなかつたけれども、その上部において彫像破片を發見した。この彫像は復原すると四米七十五糎に及ぶ大像で、ナーガの上に座した佛像である。大像なるにもかかはらず丁寧な作行で、バイヨン藝術の代表たるを愧ぢない。また同様な深掘り調査は一九三四年九月、アンコル・ヴァットの中央聖堂にも企てられたが、また十四米の深所にて水層に遭ひ中止を餘儀なくされた。さて深井掘りの調査はしばらくおくが、このアク・ヨム寺院の様式上の位置である。ステルン氏は一九三四年裝飾細部の精査から先アンコル藝術の最後、もしくはアンコル藝術の最初にあらはれたものとの見解を披瀝した。そしてそれに最も近いものとして、これも近年ロルオー・Lonoh群中にて發見されたブラサト・ブレイ・プラサト Prasat Prei Prasat 寺院をあげた。G.Cœdès, *Les capitales de Jayavarman II* (BEFEO, XVIII, p. 113) とにかく建築細部の研究はアク・ヨムとブレイ・プラサトの極めて接近した時期の建造物なることを確實にした。そのうち後者は前者よりいくらか發達してゐるが。そして九世紀中葉から後半にかけて建設されたロルオー・Lonoh バコン

Bakong プラーコ Prakhô コーライ Loiā 等に見るアンコル期の様式と先アンコル期の様式との中間様式であることが認められるに至つた。

バイヨン寺院建築の年代ひきさげ、そしてその正當なる位置の附與によつてアンコル期建築史はスムーズな整序を得た。さらにアク・ヨム、ブレイ・プラサトの中間様式の發見によつて先アンコル期との連結がよりスムーズに進展する。見やうによつてはクメール建築の一貫した配列がこゝ數年間のアンコル研究の輝しい行績であるともいへるであらう。アンコル研究に關していま一言附け加へておかなければならぬことは一九三二年をもつて完結したアンコル・ヴァット寺院 Le temple d'Angkor の三部七冊に亘る巨大なる報告圖譜であらう。それはやはり一九二六年に出版されたバンタイ・スレイ寺院の圖譜 Le temple d'Iyavapura といふもののびあひつゝもとに極東學院考古學紀要 Mémoires archéologiques publiées par l'École Française d'Extrême Orient の一部をなすものである。バンタイ・スレイ寺は十世紀にできたシヴァ神の寺院で十四世紀に大増築をやつたものでアンコル・トムの東北二十一軒の地點にある。實にフィノー氏

L. Finot をして「クメール彫塑の極盛は十三世紀にあらずして十四世紀にあり」といはしめたものはこの寺院があるためである。アンコール・ヴァット寺院はシュリヤヴァルマン二世 *Sūryavarman II* (一一一三—一一八二)——一説にはシュリヤヴァルマン二世の爲めに建てたともいはれてゐる——の建立で、ヴィシュヌ神に奉獻したものである。保存もよく、その林間に聳立する姿は最も旅行者の眼を楽しませる。

チャンパにおいても修理と復舊作業が着々として極東學院の手によつて行はれてゐる。この方面を擔當するものはクレイ氏 *J.Y. Claeys* である。一九三一、三二年はナトラン地方の荒廢したボ・ナガル寺院の復舊に集中された。そのほかチャバン *Caban* (*Binh Dinh*) ではチャム藝術の後半(チャバンは一〇〇〇—一四七一年間首都であつたヴィジャヤ *Vijaya* である)に屬する砂岩の彫刻を多數に得た。この彫像は實に様々な影響が奇妙なまでに並存してゐることに注意される。まづクメールの影響は十二・三世紀の交におけるカンボヂヤ人のヴィジャヤ占領によつて説明されるであらう。支那・安南の影響は裝飾細部のマンネリズムにあらはれる。豊富な鳥貝類

の意匠は印度文化の影響以前における印度支那古來の傳統への復歸を物語る。衰退期における瓜哇藝術のごとく、後期のチャム藝術はいまゝで潜在し印度文化の外皮でカムフラージュされてゐたところのインドネシア要素の再現が著しい。この點において最も特徴的であるのはチャバンにおける婦人の乳房によつて飾られた列石の基壇である。これは何のシンボルであるのか。ゴルウベフ氏はスマトラのトバ・バタク族に類似的の裝飾があることを示した。ハイネ・ゲルデルン氏は巨石文化期にまで遡るインドネシアの生殖儀禮の殘存であらうといふ。

ラオスではやはり極東學院のフォムベルトオ氏 *Fombertaux* によつてヴィエン・チャン *Vien Chan* のタートルオング寺 *That Luong* の復舊が活潑に行はれた。

東京地方ヴィン・ヘン *Vinh Yen* のジュン・ニン *Binh Son* では支那式四角十一級の博築塔が一九三三年に發見された。クレイ氏は九、十世紀といひ、セーデ氏は十世紀といふ。これに對してコーラル・レミヌザ夫人 *G. de Coral Rénusat* は磚に彫られた裝飾にはチャムの影響がありと見、その方面からむしろ十一、二世紀との説を提出してゐる。

(水野清 一)